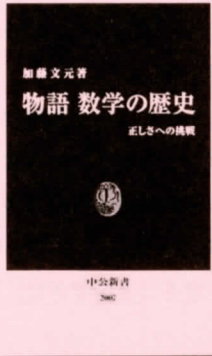


学生に読ませたい本 vol.2

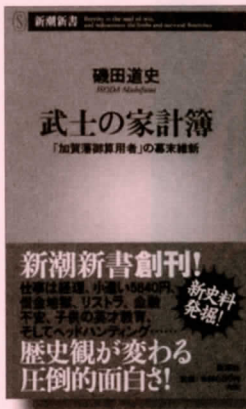
嘉藤 亮



加藤 文元 『物語 数学の歴史』(中公新書 2009年)

「科学」の特徴は、具体的対象からいったん切り離された理論的実体を対象とし、それが演繹的構造を有していること、そして実世界への応用において理論的実体と具体的対象間に対応規則が存在するところにあるといわれている。こうした点は数学のみならず、社会「科学」である法学にも共通する。むしろ両者は形式上も厳密な論理性が求められる点でかなり近いものといえよう。本書は、いわば通史として数学の発展を描写したものである。確かに函数と図形の出会いなど、数学の歴史を楽しむこともできるが、私自身が数学理論を十分に理解しているわけでもなく、本書を読むにおいてそうした知識はむしろ不要ともいえる。数学における様々な発見の内容を縦系とすれば、いわば横系として挿入されたアルキメデス

スからガウスやフィルマーに至るまで当時の時代を彩った数学者たちについてのエピソードには、彼らの数学にかける熱意とともに人間らしさと研究を楽しむ心を垣間見ることができる。さらに、数学が様々な隣接学問から刺激を受けることで、より大きな体系へと統合されていく歴史のうねり、厳密さの中に柔軟性を見出すことで化学変化が起こる過程は、自身の学問研究においても非常に示唆に富むものである。



磯田 道史 『武士の家計簿「加賀藩御算用者」の幕末維新』(新潮新書 2003年)

期せずしてまたもや数字に関する一作となるが、本書は加賀藩において財務会計処理を行う御算用者であった一藩士の残した家計簿を通じて、江戸時代の武士の生活を描いたものである。武士の世界は世襲制だったものの、算術の能力が必要とされる御算用者については比較的能力による人材採用が行われており(幕府における勘定方も同様の状況であった)、本書の主人公である猪山家もそうであった。当時の武士の給与は家柄によって定められ、役職手当のようなものもあったが、とても現実に見合ったものではなかった。また、米による給与制度は、貨幣経済の発展によって維持できなくなっていたし、どの藩も財政難で、多い時には藩士の給与を半分も召し上げていた。他方で、様々な行事への出費や家族へのおこづかいなど、一家を支える藩士の肩にかかる重圧は相当なものであったろう。

多分に漏れず借財で首が回らなかった猪山家が、蓄財を蔑視する社会の中でどのようにして節約してきたのか、そして幕末から明治に至る激動の時代をどのようにして乗り切ったのか。そこに見えるのは生き生きとした人の歴史である。当時の風俗習慣を知る意味でも非常に興味深い一冊である。

(法学部准教授)